

研究資料

『みみずのたはこと』にみる徳富蘆花粕谷住居の緑地環境
— 雑木林, 武蔵野, 鉄道路線, 道路, 山, 川との関係から —

岡島直方

緑地環境情報学研究室

2012年10月11日受付; 2013年1月29日受理

Diagrams depicting the location and original state of *Koshunen* based on the
“Earthworms Monologue (*Mimizuno-Tahakoto*)”:
The relationships among his house, coppice wood, *Musashino*, railways, and roads

Naokata Okajima

Laboratory of Green Space and Environmental Information
Minami Kyusyu University, Tatenochi
Miyakonojo 885-0035, Japan

Received October 11, 2012; Accepted January 29, 2013

The purpose of this paper is to present diagrams depicting the environment of Tokutomi's house “Koshunen 1907-1927.” His travels from his former to his final house as well as the history of these houses are presented in figures. The location of *Zoki-bayashi* or coppice woods, farmland, and genuine *Musashino* are also depicted. This work is the result of translating his literature into diagrams.

This paper depicts three plots of *Zoki-bayashi* near Tokutomi's house. One was situated to the east next to his house gate, and another on the south hill. This provided Tokutomi with a panoramic view in the form of a horizontal picture scroll, which included Mount Fuji. The third plot was found in a north-east direction from the Hachiman-shrine. All three “*Zoki-bayashi*” gave Tokutomi an impression of seasonal beauty. Their location is depicted in diagrams.

Key words: Tokutomi Roka, Koshunen, diagram, farmer, Zoki-bayashi.

1. はじめに

筆者は、雑木の庭の出現においては、それ以前の時期に明治の文人達によって新しい価値観の表出がなされたことが重要なきっかけとして存在していたのではないかと考え、その価値観やその価値観形成に寄与したことを探ってきた。東京郊外にあったナラ林の美的側面に気がついたのは国木田独歩（以降国木田）にどのような思考性向があったからなのか¹⁾、著書とその主張に惹かれて訪問したトルストイの屋敷で徳富蘆花（以降徳富）が体験してきたことは何だったのか²⁾を検討してきた。徳富が著書『自然と人生』の中の「雑木林」という題の短編で「余はこの雑木林を愛す。」と述べたのは1900年のことである³⁾。それから7年後、徳富は突然東京郊外の農村地域に移り住んだ。この行為は国木田が「武蔵野」と読んでいた場所に向かっ

て、徳富が接近した行為なのかもしれないと推測された。しかし別の解釈では、トルストイに会いに行き影響を受けたことがもたらした結果なのかもしれない。この移転はいかにして行われたのか、その着地点はどのような環境であったのかなどを知ることにより、徳富にとっての雑木林が何であったのか、トルストイからの影響は何であったのかを探ることができると思われる。

この農村への転居という出来事の前後の彼の境遇を概観すると以下のようなものである⁴⁾。1905年頃の徳富蘆花（1868～1927）は三年間に及ぶ「スランプ」⁵⁾を経験していた。1899年に発表した『不如帰』、1900年に発表した『自然と人生』、『思出の記』などはベストセラーになり多くの人に読まれるようになっていたが、出版社を経営する⁶⁾兄とは激しい対立をしていた。彼を世に出してくれたのは兄の会社から出版されたそれらの出版物であったので、この件は彼の心理に暗い影を落

としていた。1903年には日露戦争が始まり、それまで自分が放蕩な生活を続けていたことを反省し、生活の刷新を計ろうとした。菜食を始めたり、福音書を読んだりしたがなかなかスランプ解決の手がかりが得られなかった。そのとき、トルストイの『われら何を為すべきや』を読んで感動し（それまでも彼はトルストイの小説『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』は読んでいた）、トルストイ訪問を思い立った。1906年にその旅行は実施された。旅行は、上海、シンガポール、インド洋を通過してエルサレムに達し、黒海のそばを通過してモスクワへ行きバイカル湖の南を通る北回りを経て帰国するもので、時計回りの大きな円を描く行程であった。聖書の地エルサレムはこの旅行でぜひとも行っておきたかった場所であったが、実際に行ってみるとそこでは徳富は収穫を得ることはできなかった。その後、彼はかねてから尊敬していたトルストイの邸宅を訪ねる。そこでトルストイから比較的可愛がられて5日間過ごした。トルストイの屋敷は広大で、その広大な敷地を経営するトルストイの姿は、これまで『戦争と平和』や『アンナ・カレーニナ』などの著作によって小説家としての側面のみが見えていた徳富にとって大いに啓蒙されるところがあったはずである。広大な敷地の中で、徳富は農作業の手伝いをしたり水浴したり散歩したりして過ごした⁷⁾。トルストイは、徳富に農業の大切さを説いた。帰国した翌年の1907年から徳富は東京郊外の千歳村粕谷に転居し農業生活を実行し始めた（後にこの場所は徳富自身によって「恒春園」（1918）と命名され、彼の亡くなった11年後の1938年から東京の公園「蘆花恒春園」として管理・公開されている）のである。この千歳村粕谷での徳富の生活を綴った書籍として『みみずのたはこと』（初版1913年）がある。本論は、この書籍をもとにして、当時徳富が生活をした場所の緑地環境がどのようなものであったかを明らかにすることを目的とする。文学作品を読者として読む場合には、書かれた内容のうち印象的な場面を頭の中で一瞬イメージするものの、続きの本文を読み進めていくうちに、想定したイメージは自然に消えていくので、記憶として特段定着しないと思われる。そこで、本論では当時徳富の住んでいた緑地環境の状況を図として描く。それにより徳富が住んでいたのがどのような場所であったかを明らかにし、記憶に残りやすくできると考えた。また当時の平面図や写真を参考にしながら現況との相違をさぐることもテーマとなる。調査に用いるのは岩波文庫の『みみずのたはこと』上下2巻⁸⁾である。課題を達成するために次のような手順をとることとする。以降の2で徳富の千歳村転居の経緯とその環境についてまとめる。この中には建物の配置に関する情報、その環境の中で徳富が何をなしたかの情報が含まれる。3において雑木林との関わりの中からその場所がどんな環境であったかを検証する。4において徳富にとっての武蔵野とは何だったかをまとめる。最後に5において総括する。

2. 徳富の粕谷転居について

（1）引越しの経緯

徳富は1900年からは原宿で借住まいをしていた。1906年8月にトルストイ訪問から帰ってきたときに、青山高樹町の借家に移っている（上 p.28）。同年11月には早くも田舎住まいを目的として土地を探しはじめた。借家や借地でも草花くらいは栽培できるが、借りているということからどうしても「気が置ける」とは彼の言である（p.28）。400ヘクタールを超える広大な土地で農業や育林を行っているトルストイの屋敷を見てきた後である²⁾。田舎の広い土地で農業と関わりをもって生きていくことが、徳富の頭の中に理想として確立したと考えられる。徳富は熊本時代にすでに洗礼を受けたクリスチャンであった。先輩の牧師に相談したところ、玉川の近くの伝道地に行ってみたらどうであろうかとの示唆をえた。徳富は「玉川に近い」という示唆を受けて惹かれるものを感じ、行動を決意する³⁾。その土地を尋ねて徳富は青山高樹町の借家を出て愛子夫人と二人で玉川電鉄の線路を三軒茶屋まで歩いた（図1）。彼は千歳村がさらに遠いところにあることを知らなかった。高樹町から三軒茶屋駅までは現在の地図によれば約5kmであり、そこから粕谷村（現在の蘆花恒春園を指標とする）までは約6.4kmである。三軒茶屋からは人に聞きながら歩いて行った。牧師のいる教会に着いたあと、徳富は牧師に、「会堂」（教会の建物のこと）を見せてほしいと述べている。これは、最初から移住できる土地のことについてたずねても理解してもらうのが困難だと考えたからであろう。いきなり用件は話さず教会を見せてもらいたいと話した後には田舎住まいがしたいと申し出た。そのようなことを望む人は当時いなかったことであろう。牧師の反応は、その会堂付きの牧師として住んでみるのはいかがでしょうかということであった。徳富にはその意志はなかったが、教会の建物だけ見せてもらって帰途についた。その日物件は見つけられなかった。帰りは教会から北上し、甲州街道¹⁰⁾（図1、補注図2参照）に到達するとそれをたどって新宿まで歩き、家に戻った。実際に粕谷村に行ったところ、多摩川は決して近くない（「一里の余」ある）し、風景も平凡であることを知り、その場所に移住する気持ちは弱くなってしまった。

徳富が雇っていた女中の故郷は彦根で、その近辺には安くて山が美しく水が清い場所があると聞いて心動かされたので、そこに移り住もうと考え女中を通じて故郷に照会してもらっているはずなのに返事はいっこうにこなかった。教会を訪ねてから二ヵ月後に、千歳村の牧師が高樹町まで訪ねてきて、候補地を三か所案内してくれるというので、気が進まないながらも行ってみたいという。そのうちの1つが現在恒春園となっている場所であった。そこは小高い場所にあり見晴らしが良かった。1反5畝（約992m²）の土地に草葺の家が付いていた。家の前は麦畑で後ろは小杉林や三角形の櫟林があった。家にはまだ先の住人が住んでいた。その家の家主は隣宇に住む大工であった。これを見て、徳富はここで我慢するかなと思いながらいったん家に

帰っている。そのあと牧師からは催促をされ、女中の郷里からは連絡がなく、貯金は少なくなる中、徳富は結局粕谷の土地に決めて、牧師にお金を支払った。牧師にお金を渡すと徳富は早速引越したいと思った。まず住めるようにするためにその家の掃除をし、次の日に引越しをすると決めた。引越し日を彼は自虐的に「都落ちの日」と呼んだ。掃除の日、徳富夫妻は手伝いの娘二人と歩いてその場所に通い、前の住人に移動してもらった後、草葺の家の掃除をし、歩いて高樹町の家にもどった。先住人が出て行ったあとの住居は放埒な生活の跡がそのまま残されていたので、掃除にはかなり手間取り、夜はくたくたであったという。翌日の引越し日の日付けは1907年2月27日で、4台の荷車にのせて家財を運んだ。家財のほとんどは書物と植木であったという。徳富は園芸が好きだった。原宿も高樹町も借家であるから気が置けるといいながらも、実際には鉢物や地植の植物があったのだった。栗や株立ちの榛の木を荷車に入れた。荷物は昼すぎに家から送り出した。夫妻は女中一人と一緒に新宿まで電車で行き、そこから甲州街道を馬車で進み、(上)高井戸で降りたあと現地までは歩いていった。その地で亡くなるまでの20年を過ごすことになる。

(2) 建て増しの経緯

徳富は東京市赤坂区青山高樹町から1907年(明治40年)2月に東京府北多摩郡千歳村字粕谷に移った。徳富の死後、この住居を含む敷地が公園になったが、そのときの平面図を用いて徳富の住居の配置図を図2に示す¹¹⁾。最初に1反5畝の地面と一軒のあばら家を購入した。このあばら家を彼は「母屋」とか「茅屋」と呼んでいた(図2①)。同年秋、そこに浴室と女中部屋を増築した。1909年の春に8畳と6畳がある離れの書院を建てた。これは「梅花書院」と呼ばれている。旧書院、表書院とも呼ばれていた(図2②)。翌年の夏に客室兼物置を「ズッと裏の方に」建てた。その場所は現在蘆花記念館が建っている場所である。1911年には25坪の書院を西の方に建てた。この書院は「秋水書院」もしくは奥書院と呼ばれている(図2③)。ここで「日課」を書いたりした(『みみずのたはこと』下巻p.74、以降、下p.74と表記)。そして11間と2間半¹²⁾の一間幅の廊下で母屋と旧書院と新書院を結んだ。図2にこれらの位置関係を示した。木元氏(謝辞参照)によれば徳富は死の直前、これら3つの建物を全て取り壊して、洋館を建てる計画を練っていたがかなわなかった。図2の中央付近の▲の印がついているところが屋敷の入口であった。引越し初期には屋敷に

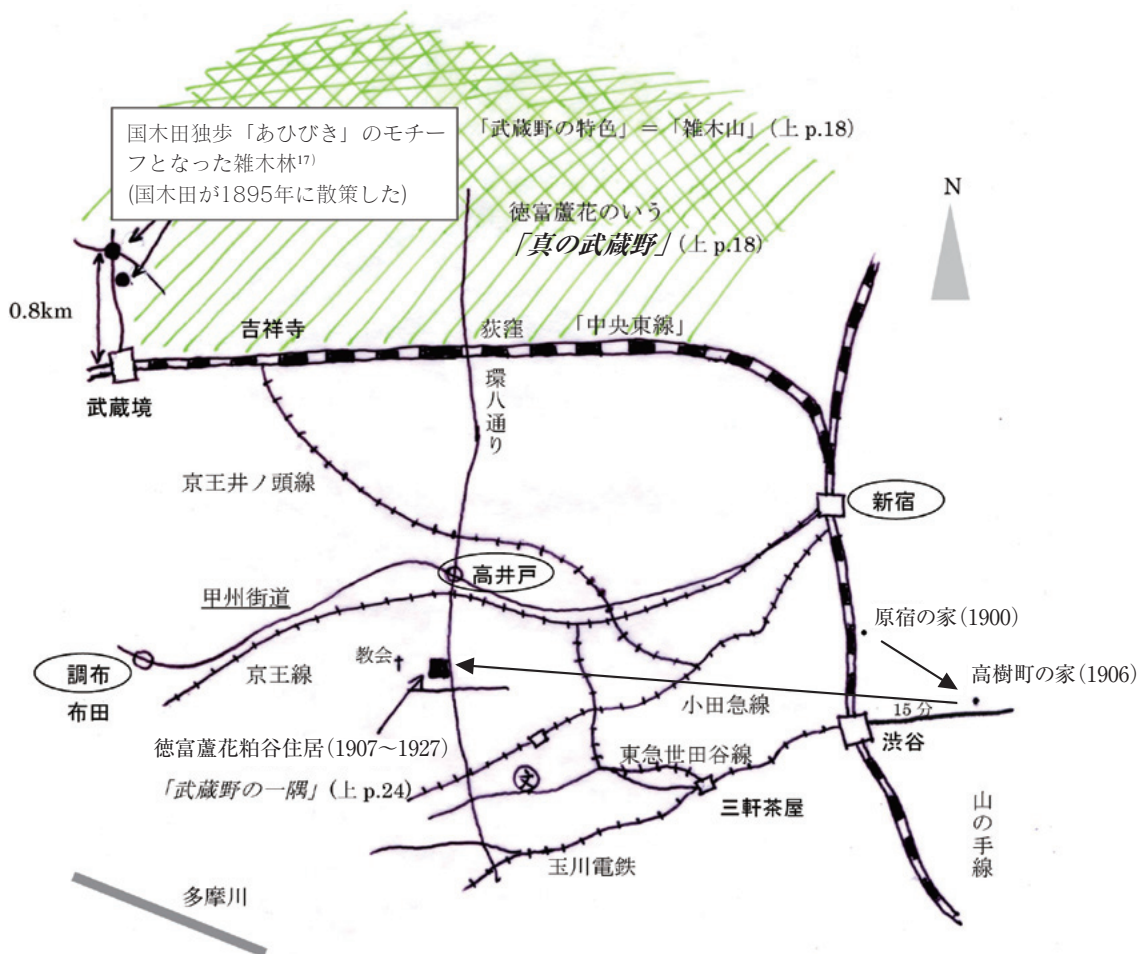


図1. 徳富の住居(1907-1927)と「真の武蔵野」(甲州街道については補注図2参照のこと)

垣も門も設けていなかったの、近所の小学生が屋敷の中を行き来することがあった。そこで1912年に屋敷のまわりに竹で四つ目垣をめぐらせた。カナメモチ、ハギ、ドウダンで生垣をつくり、大小6つの門をつけたのだった(上p.15)。1反5畝の土と15坪のあばら屋は、徳富を満足させるものであり、「帝王」の気持ちになったという(上p.37)。1912年には敷地を2000坪強に増やした。

(3) 当時の住宅と田畑の位置

2-(1) で見たように、東京から歩いて時間をかけて探し求めたその土地で徳富は一体何を行ったのか。屋敷を囲い、できた空間に庭と園を造っていった。同時に囲いの外にある田んぼや畑で働いた。そういうことに精を出す主体、つまり自分自身のことを、徳富は文中で「僕」(上p.13)、「彼」(上p.27)、「空兵衛太五作」(下p.38)、「美的百姓」(上p.235)などと呼んでいる。農業を本格的にやりそうに見えながら専門の農家になることはない。徳富曰く「生活の百姓」ではなく「趣味の百姓」である。しかし、この趣味の百姓をすることが、真実の文学を書くことにつながると徳富は信じていた。トルストイの場合は、自らが貴族で

あり身の回りの様々なことを農奴が行っており、広大な敷地を管理することもできた。しかし、徳富の場合はそうはいかない。徳富は作男を雇ったり人に手伝ってもらったりしながら自家の畑で収穫をもたらすようにした。農に取り組んでいる徳富の姿を示す画像が写真1である。また同じ畑を耕している徳富を、離れた位置から写したものが写真2である。これら写真1,2では前景に畑が写り奥に建物が写っている。建物は○で囲って示した。両写真は明らかに同じ方角に向かって写したものである。これが敷地のどこの位置からの写真であるかについて木元氏(謝辞を参照)と検討したところ、図2において「写真1,2」と表示した場所であろうと推定した¹³⁾。やや屋敷から離れた別の場所から写した画像に写真3がある。図2には南西部分に「児童公園」と書いた場所がある。ここは恒春園が出来たときの平面図には載っていない。現在の蘆花恒春園は、開園時の6.3倍の広さの公園となっている。写真3をもとに当時田畑となっていた場所はどこだったのか検討したところ、図2上で「写真3→」と示した方向に向かって撮影されていると考えられた。梅花書屋や秋水書院のすぐ西まで田畑があり、■ ■ ■ ■の部分には田畑がはじまる境界にあった生垣だったと推定した。



図2. 蘆花恒春園開園当時(1938年)の配置図¹¹⁾に加筆した土地利用の履歴

3. 雑木林との関わりで見る立地と周辺環境の図解

2-(1)で、徳富が引越し前後に粕谷村を往復した道を文章で示した。これらを図として示すことにより彼が選択した移住場所の立地が明らかになるのでそれを示したものが図1であった。家探しの帰りと引越し当日の日に用いた甲州街道は補注図2である。補注図2における「内藤新宿」と「布田五々宿」(現在の調布)の間のあたりが上に登場した場所となる。これらの大きな位置づけの理解をもとに徳富の『みみずのたはこと』の中で雑木林はどこにあったのかを探っていく。

これらの林のうち比較的まとまった面積で存在していて、原文を読むことで場所を特定できるものを抽出することにするが、この他にも雑木が残っていた場所は点在していたことであろう。

(1) 門前(東隣)の雑木林

徳富が最初に移り住んだ母屋の東側に雑木林があった。それは家の門のすぐ目の前にあった。その雑木林のすぐ南側は共同墓地だった。既に図2に表示してある。これは現在も残っている。この雑木林は徳富がこの地に家を購入したときから道を隔てた東隣地にあったものであったもので徳富の所有ではない。この雑木林についての徳富の記述内容を指摘する。原文から引用する場合は、「」で表示する。ただ全てを原文そのまま引用をすることはしない。『みみずのたはこと』における前後の文脈が分からずにそのままここで引用すると、本論と関係のあるところが見えにくくなったり、唐突になってしまい関係の薄いところが強調されたりする場合があると考えられるからだ。その場合には表現の言い換えを行っている。言い換えた表記(主に名詞)には下線をつけ、原文の表記は注で示している。なお植物名はカタカナで表記した。

- ・「一番近い隣が墓地に雑木林」との記述がある。(上 p.46)
- ・ある秋の朝、「門前の雑木林の中で」がさがさ音がするので見たところ、一人の男がそこで一晩寝ていたらしかったが、起きて立ち去った。乞食だったという。(上 121) 当時乞食は冬に雑木林の中の落葉(おちば)でたき火をして過ごすことがあった。
- ・徳富の家は四辺が静か¹⁴⁾なので、時折生じる物音がはっきり聞こえた。徳富にとって「一番好い」のは、春四月に、この(東隣の)雑木林に朝日が射すとき、ぼたり、ぼたりと若葉をすべる露の滴りの音が聴こえることだった。(上 p.198)
- ・この雑木林について、徳富は「出ると直ぐ雑木林。彼の有ではないが、千金替ならず彼に愛される。」と記している。(上 p.198) 家のうしろ¹⁵⁾には小杉林(上 p.34)と三角形をなすクヌギ林(上 p.34, 198)があった。門前の雑木林とともにクヌギ林は、春や夏に若葉青葉のトンネルを造った。秋には、落ち葉のおかげで人が行ったり来たりする足音が聞こえるようになると記している¹⁶⁾。そこは蛇の巣になった(上 p.198)。



写真1. 畑を耕す徳富蘆花1



写真2. 畑を耕す徳富蘆花2

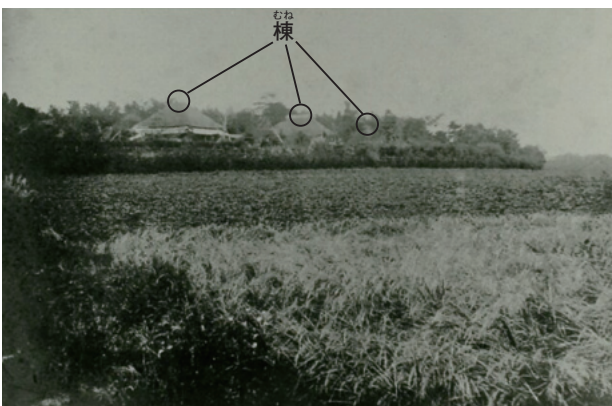


写真3. 徳富の住居と周辺環境

(草葺屋根の下に張り出した庇が見えている建物が秋水書院、右側は梅花書屋)



写真4. 東隣の雑木林 (撮影2012年10月19日)

(この小道の奥に母屋がある。現在ここに、樹木としてはコナラ、クヌギ、イヌシデ、エノキ、カヤ、イロハモミジ等、地被植物としてアズマネザサが確認できる。)

- ・ 林の中では様々な植物の花がさいた。ツボスミレ、キンラン、ギンラン、エゴ、ヨツドドメ、シラユリ、ナデシコ、ヒオウギ、ハギ、オミナエシ、ワレモコウ、リンドウなどである。秋は虫かごのようでクツワムシはやかましいほど鳴く。こうした虫の音を徳富は否定的に表現をしていない。(上 p.198)
 - ・ 「雨がつついたあとでは雑木林に茸が立つ。…や…が策をかゝえて(茸を)採りに来る。」(上 p.144) は、この東隣の雑木林のことであろう。採りに来るという表現には、別の場所から徳富の家のそばに人がやってくるという意味が含まれるからである。
 - ・ 墓地のそばには本当はもっと雑木が生えていたが、墓地の拡張に伴って雑木と小杉林が切られてしまったと書かれている。
 - ・ 5月終わりごろ、徳富が夕方一時間ばかり激しい雷雨があったあと晴れたので敷地の外に出てみると、「櫟や檜はまだ緑の雫を滴らして」いた(下 p.56)。(1911年の記述)
 - ・ ある夏の日、徳富は早起きした。「戸をくると、櫟林から朝日の金光線が射して居る」(上 p.78)
- この門前の雑木林の現在の状況を撮影したものが写真4である。

(2) 八幡神社向こうの雑木山

訪問客を帰りに見送りに行くときに見える雑木林があった。その雑木林は家から直接は見えなかったと思われる。まず彼の家を「裏の方へ100歩」行くと八幡神社があった(上 p.82)。八幡神社は、田んぼを見下ろして東向きに立っていた。鳥居を出たすぐのところには樹齢100年の大きなスギが立っていた。このスギの下からは東の田圃が見渡せた。徳富はここまで訪問客を見送りにやってきた。里道が八幡神社の横からオオスギの下を通して東に向かい、すぐ北に曲がる。そして小さな田川に沿って約50歩北に行き、橋をわたり東に曲がって約100歩行って大きな田川の橋を渡り、

分岐点を北に曲がり、2丁行って雑木山の端を東に折れ、北に折れて6丁ほどいくと甲州街道に出る。雑木山の曲がり角に1本のヒノキがあって、そのあたりまでは、神社の大きなスギの下からよく見えていたので徳富は人を見送ったことがあった。曲がり角の一本ヒノキを通り過ぎても、まだ客人の姿が見えていたことがあったので、その人の姿が(雑木林に隠れて)本当に見えなくなるまでじっと見送っていたこともあった。徳富はこの大きなスギを「見送の杉」(上 p.84)「別れの杉」(上 p.82,84)と読んでいた。これらの記述をモデル化したものを図3に示す。(上 p.84) 図3の斜線部分で示したところが八幡神社向こうの雑木山である。

- ・ あるとき八幡下で二人のお婆さんがこの雑木山での出来事について立ち話をしていた。「田んぼ向こうの雑木山」と表現されているので上述の雑木山と同じであると判断できる。立ち話ではこの雑木山の中に20代ほどの男女がいたという。男はせつせと土を掘り、女は青ざめた顔をしていて、二人は胎児を埋めようとしているように見えたという。徳富は気になってその雑木山の西側を這って進む径に入ってしまった。二人を見つけようと声をかけながらとうとう甲州街道まで出てしまったが、また引き返して今度は雑木山の東側の径を通して帰ってきた。雑木山は静寂であり、上部を欠いた月が裸になった雑木のこずえに青白く光っていた。林の中は月明かりでは白かった。声をかけても林の中から返事はなかったし、土の下からも音はしなかった。(下 p.118)
- ・ 飼っていた犬を知人に渡すことになったとき、徳富はこの雑木山の方に向かって犬をつれて行った。荻窪の停車場まで犬を連れて行くことになったのである。その途中「田圃を通して、雑木山に入る岐れ道」までやってきて、徳富は八幡下に立って見送っている愛子夫人に犬との告別をさせたという。(上 p.92) このときの「雑木山」も、ここで指摘している八幡神社向こうの雑木山であろう。

(3) 谷の南の雑木林

徳富の家は、低い丘の南端にあった。そこは周囲よりは小高い場所で南と西への眺望がよかった。その環境を示したものが図4である。南側は谷になっていて田んぼがあった(上 p.193)。その谷の向こう側の正面には、丘があり、そこに雑木林、小杉林、畑などが入り乱れた北向きの斜面が見えた。その向こうには隣村が見えた。この雑木林は徳富にとっては遠景を提供したと思われる。

- ・ この谷向こうの雑木林が、若葉、青葉、秋葉と三度の榮を見せるのが、徳富が住んでいる丘から見えた。(上 p.197) 徳富の家のある低い丘にいと、秋風が、隣村のこずえ、丘の上のクヌギ林、谷のススキ、自分の家の松へと次第に自分の側に向かって吹いてくる様子を知ることができた(上 p.197)。このような季節の変化を感じさせてくれる場所を「指点するに好い。」と表現している。3-(1)で指摘した東隣の雑木林だけでなく、ここの雑木林でも夜に賭博をやっていた人がつけた火が見えることがあった。

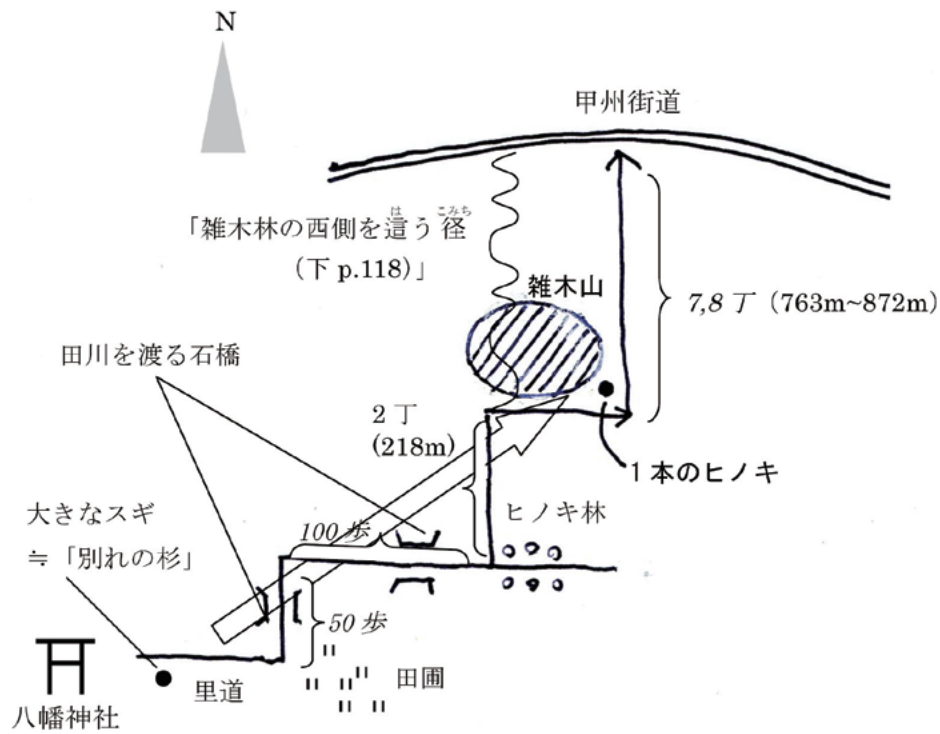


図3. 八幡神社の「別れの杉」から見える雑木山

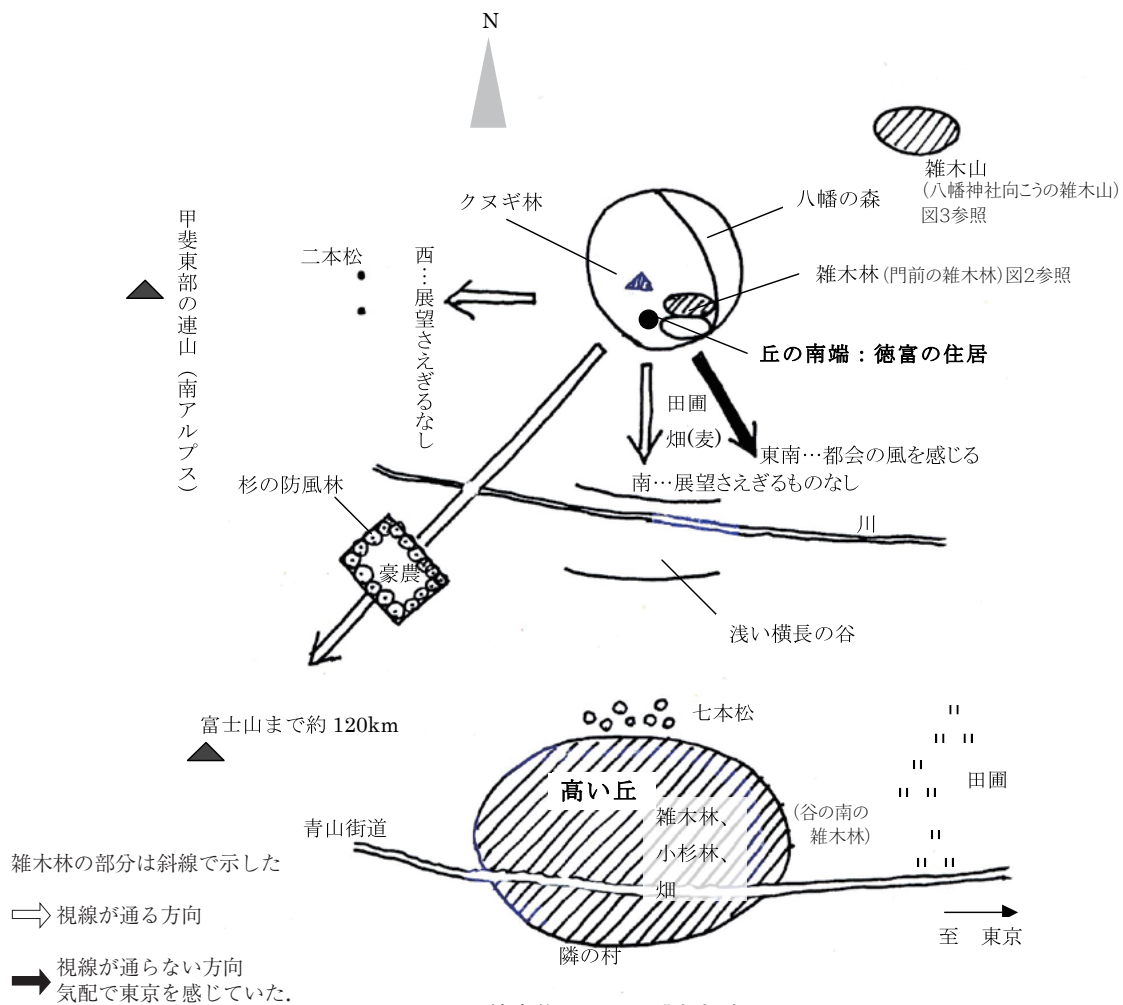


図4. 徳富住居からの眺望概念図

しだいに取締りが厳重になったのでこうした人々を見ることは徐々になくなったと述べている。

- ・「彼等が東京から越してきた時、麦はまだ六七寸、雲雀の歌も洩りがちで、赤裸な雑木林の梢から真白な富士を見て居た武蔵野は、裸から若葉、若葉から青葉、青葉から五彩美しい秋の錦となり、移り変わる自然の面影は其日々、其月々の趣を、初めて落ち着いて田舎に住む彼等の目の前に巻物の如くのべて見せた。」(上 p.55)

と書いてある場所は、おそらくこの谷の南の雑木林をさすのではないかと考える。前述のように1900年、まだ原宿にいたころに『自然と人生』は書かれ、「余はこの雑木林を愛す。」と述べている。しかし、その雑木林は田舎に定着して見るものではなく、旅人として見た雑木林だった。しかし、(1)から(3)で抽出した雑木林は、自分の住居のそばにあるものである。すぐ上の(上 p.55)の記述に現れている雑木林は、家のすぐ東隣や八幡下にあった雑木林を指しているのではないと考える。その根拠は、「巻物の如くのべて見せた。」という表現から、横方向に広がる巻物のイメージが連想されることと、富士山が見えるという視点から見たときに、その視野の中に雑木林が入っているとすれば、これまで上でとりあげた三者の中では、谷の南の雑木林が最も妥当な場所にあると考えられるからである。

- ・「儂が越してきた当座は、まだ田圃向うの雑木山に夜灯をとぼして賭博をやったりして居た。」(上 p.19)としているのは、この谷の向こうの雑木林であろう。

(4) 切り拓かれた雑木林

徳富は同書の数か所で雑木林が切り開かれていく様子を書き残している。

- ・「東京で瓦斯を使う様になって、…村の雑木山が大分拓かれて麦畑になった。道側の並木の樺櫨など伐られ掘られて、短冊形の荒畑が続々出来る。武蔵野の特色なる雑木山を無惨々、拓かるゝのは、儂にとっては肉を削がるゝ思だが、生活がなすわざだ、詮方は無い。」(上 p.18)。

この記述にあるように、林と呼べない状態になって残されていた雑木が点在する事態が生じていたのではないと思われる。それは「左右から公道を侵した雑草や雑木を一同磨ぎ耗らした鎌で切り払う」(上 p.140)に表わされている。

4. 徳富にとっての「武蔵野」

徳富は、表向きは自分のことを「毎に武蔵野の住民と称して居る」(上 p.192)と言っている。しかし本当は自分の住居は「武蔵野の一隅にある」(上 p.24)、「武蔵野も場末」であると認識していた。決して本格的な「武蔵野」のただ中にいるとは思っていなかった。「景が小さく、豪宕な気象に乏しい」(上 p.192)のが理由である。しかし、武蔵野の雰囲気を楽しむことはできると考えていた。徳富は当時どこを武蔵野と捉えていたのか、それを図1に書き加えた。徳富は「真の武蔵

野を見る」には、「彼の家から近くて一里強北に当たって居る中央東線の鉄路を踏み切って更に北上せねばならぬ。」(上 p.192)と述べている。

5. まとめ

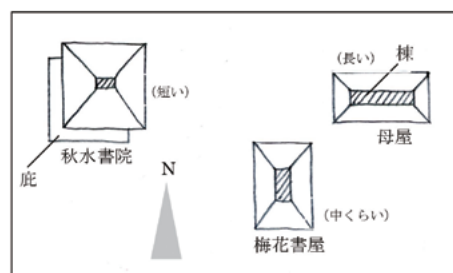
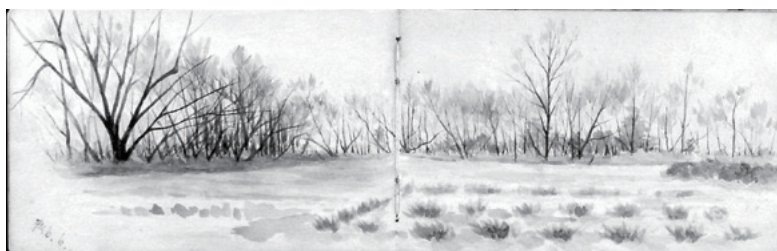
1907年に移り住むことになった徳富の住居は、江戸時代は徳川家の林だった場所を明治時代になってひらいてできた土地であったと徳富は言っている。本論により、『みみずのたはこと』の文章を元に、

- ① 徳富が東京郊外の田舎住まいの場所を確定するまでにとった行動のなかで自らの足を使って歩いて行き来した動き(図1)。
- ② 移住先が決定した後、徳富が建物を増やしていった過程(図2)。
- ③ 徳富が農業を行った圃場は現在においては林になっているが、当時は秋水書院のすぐ西の部分に圃場が広がっていたこと(図2)(写真3)。
- ④ 徳富の住宅の周辺には、少なくとも三か所のまとまった雑木林の領域が存在しており、それらが彼の生活感を刺激していたこと(図2)(図3)(図4)。
- ⑤ 徳富の住宅と、彼が「真の武蔵野」と呼んでいた場所との位置関係(図1)。

などを図示することができた。いずれも徳富の住居をめぐる空間上の位置を把握するための資料となる。文章を読んで想起するイメージを記憶に残りやすい形で表現できたと考える。③で、開園当初の恒春園ですら徳富が実際住んでいた頃とはすでに異なっていたことを把握することができた。現在の恒春園には、徳富が意気込んで行った「農」の場所は残されていないことが示された。1900年に徳富は「余はこの雑木林を愛す」と述べている。④は、そうしたタイプの自然である雑木林が自宅のそばに見られる環境に当時徳富が住んでいたことを示す。現代においても一般に雑木林の存在は、そばにそれを管理している人、もしくはそれを植えた人が住んでいることを想起させ、常緑樹林のそばにあればほっと一息感じさせてくれる場所である。周囲に雑木林があったからこそ、この地に移り住んでも良いと徳富は思ったのだろうと筆者は考える。

要 約

徳富は1907年から東京郊外の粕谷の土地に移り住むことになった。本論ではその場所がいかに彼によって発見されたか、敷地内の建物がいかに増えていったかを図示した。さらに当時の圃場、周囲の雑木林、彼が「真の武蔵野」と呼んでいた場所の位置を、彼の文章を手掛かりにして図化した。徳富は景色の構成要素についてかなり注意深く文章化しているため、精読により図化することは難しくはなかった。これによると家の周りに少なくとも三箇所の雑木林の領域を特定す



ることができ、これらが彼の生活感を刺激した様子が抽出された。また彼の住居、「真の武蔵野」、鉄道、道路などの地理上の位置関係を示すことができた。

謝 辭

本調査に当たりまして、蘆花恒春園サービスセンターの木元弘一氏にお世話になりました。2012年10月19日に同氏にはお話を伺い現地検証を行うことができました。お礼を申し上げます。

資料提供者

写真1, 2, 3, 補注図1: 東京都立蘆花恒春園蘆花記念館
所蔵

補注写真1: ヤスナヤポリヤーナ・レオ・トルストイ
屋敷美術館所蔵

補 注

- ることができ、これらが彼の生活感を刺激した様子が抽出された。また彼の住居、「真の武蔵野」、鉄道、道路などの地理上の位置関係を示すことができた。

謝 辞

本調査に当たりまして、蘆花恒春園サービスセンターの木元弘一氏にお世話になりました。2012年10月19日に同氏にはお話を伺い現地検証を行うことができました。お礼を申し上げます。

資料提供者

写真1, 2, 3, 補注図1: 東京都立蘆花恒春園蘆花記念館所蔵

補注写真1: ヤスナヤポリヤーナ・レオ・トルストイ屋敷美術館所蔵

補 注

 - 1) 岡島直方: 国木田独歩『忘れ得ぬ人々』に描かれた「風景」の特質, 南九州大学研究報告 **42B**: pp.49-59, 2012.
 - 2) 岡島直方: 雑木の庭が出現するまでの文化的背景とロシア文豪の屋敷内樹林地の現状, 南九州大学研究報告 **41B**: pp.7-16, 2011.
 - 3) 徳富蘆花: 自然と人生, 岩波文庫, 1994, p.64
 - 4) 福田清人, 岡本正臣: 徳富蘆花, 清水書院, 1988, 初版は1967年. 本文ではこの文献をもとに徳富の境遇をまとめている.
 - 5) 前掲4) pp.67-94
 - 6) 兄の徳富蘇峰は1887年に「民友社」を設立した. 同社から月刊誌『国民之友』が発行された. 1890年に蘇峰は「国民新聞社」を設立し, 日刊新聞としての「国民新聞」が発行された. 1892年には「家庭雑誌」が発行された. これらの媒体は, 蘆花の作品発表の舞台となった.
 - 7) 前掲2) 在りし日のトルストイが, 住宅そばの小道を歩いているときの写真が補注写真1である.
 - 8) 徳富蘆花: みみずのたはこと(上)(下), 岩波文庫, 2008. 下巻の末尾に, 底本は「1923年の震災あとの復活版である」と記されている.
 - 9) 前掲8)(上), p.27. 同書に次の記述がある. 「先輩の牧師に其事を話したら, 玉川の附近に教会の伝道地がある, 往ったら如何と云う. 伝道師は御免を蒙る, 生活に行くのです, と云ったものの、

玉川と云うに心動いて、兎に角見に行きましょうと答えた。」「玉川」と表記しているが、多摩川のことである。田舎住まいをしようとして候補地（粕谷村）を見に出かけたとき、徳富は最初そこが多摩川の近くだと思っていたということは、木元弘一氏（以降木元氏、謝辞参照）による示唆であった。そこで多摩川が国木田にとってどういう場所だったのかに興味を湧いた。小編「雑木林」で、徳富は、東京の西郊で多摩川にいたるまでの間の「其處此處」には、「角に劃られたる多くの雑木林がありて残れり」とし、そのような林をさして、「余は斯この雑木林を愛す。」（前掲3）, p.64）と記している。この小編の情報からは、多摩川までの丘や谷には、彼が愛している「雑木林」という自然形態があったことが分かり、田舎住まいをする場所として惹き付けられた一要因であったと読み取れた。徳富は1897年頃、自然のスケッチをしていた。そのスケッチの中に、雑木林をモチーフにしたものが1点存在する。それは、補注図1のとおりである。

- 10) 甲州街道は有事の際に江戸城からの避難路として江戸幕府が造成したとされる。日本橋を起点として下諏訪に至る道路である。徳富が歩いたのはそのうちの3駅間である。補注図2に示すとおりである。
- 11) 川本昭雄：蘆花恒春園，東京都公園協会監修・東京公園文庫22，郷学舎，1981,p.41。図2は同書に掲載されている図を北が上になるように微少に左回転させて、一部加筆して作成したものである。回転するにあたってはGoogle Earthで道路の向きを見ながら調節した。
- 12) 1間は1.818mである，1反は約992m²である。
- 13) これを判断したのは、写真1，写真2の遠景になっている茅葺建物の屋根のシルエットの形からである。現地での視察によれば母屋，梅花書屋，秋水書院の3つの建物の順に，屋根の上の棟の長さが短くなっていた。その屋根の棟の形状を示したのが補注図3である。このことは、写真1・2・3を

写した場所を推定する上でも有効な手がかりとなる。敷地内の景色や蘆花の写真が残存しているのは、蘆花には専属のカメラマンがいて、随時撮影を依頼していたからであることは木元氏の示唆であった。

- 14) 原文では「四辺が寂しいので、色々な物音が耳に響く」と表現されている。「四辺が寂しい」というのは文学的表現であり、音が静かであるほかに、周辺に人家がないということ、つまり家の密集度が低いことも含みうる。本論の文脈では、そこまで読み込み可能な原表現にすると分かりにくくなる可能性があると考え、本文では音の状態だけにしぼった。
- 15) おそらく家の北側であろう。「うしろ」というひびきには、「後」（上 p.34）と「背」（上 p.198）の二種類の表記が使われている。
- 16) 「青空から降る雨の様に落葉する頃は、人の往来の音が耳に立つ。」と表現している。これは、樹木の高さが高いので、あたかも天空から降り立ってくる雨のように、視界いっぱい落ちてくる葉っぱのことを言っていると思われる。
- 17) 前掲書1）p.58.
- 18) <http://www.jinriki.info> による。

参考文献

- 1) 公益財団法人 東京都公園協会（2012），武蔵野と蘆花 世田谷の歴史・文化さんぽ，2012年2月発行，A4版，全30ページ。蘆花が東京青山から千歳村に移住したときから105年経過したことを記念して行われた企画展の冊子である。
- 2) 公益財団法人 東京都公園協会（2011），蘆花恒春園（蘆花記念館図録），A5版，全29ページ，2011年3月発行。この冊子は蘆花記念館の50周年に開催した特別展を機に刊行された図録である。